【出雲族概要】

出雲族は侵略しないインドの竜族 クナトノ族だった。およそ 4000 年前に牛族に追われ、日本を目指す。他の国と戦わないよう大きく北へ迂回しカムチャッカから北海道に南下し津軽に到着し拠点を作る。戦わずに暮らしていた縄文人に、さまざまな技術を伝えながら同化。寒冷化にともない 1000 年かけてしだいに南下し出雲が中心地となった。国王に推され出雲王国として日本全体を統治する。西出雲の「神門臣家」と東出雲の「富家（向家）」の二つの王家があり、交代制で主王の大名持と副王の少名彦を一人ずつ務めた。北九州に住みついた一族はのちに宗像大社を作った。

徐福は秦の始皇帝に征服された斎国の王族だった。始皇帝も徐福もイスラエルの失われた十氏族。蓬莱（日本）にイスラエルの国を作ることを目的に始皇帝から不老不死の薬を手に入れてくることを理由に莫大な富と人員を乗せて日本に来た。しかし、出雲族に抵抗され中国に戻った。2 度目は 1 年前にアメノホヒとその息子のタケヒナドリをスパイとして出雲に送り込んだ。アメノホヒは事前に対馬に渡り日本語を学んでいた。貢物を献上し徐福が 1 年後にたくさんの子供たちを連れて上陸することを伝え、そのまま出雲王族に仕えた。1 年後に徐福と機織りの技術を持った子供たち（海童）が上陸、秦から機を伝えて「秦族」と呼ばれるようになった。徐福は「ホアカリ （天火明命） 」 を名乗る。道教や北極星や北斗七星の星神信仰を持つ。その時代はまだユダヤ一神教の考えは薄かった。

紀元前 660 年頃のこと。
出雲王国 8 代目の主王大名持は西出雲王家の神門臣家の大国主（ヤチホコ王）。副王少名彦は東出雲王家の富家の事代主だった。事代主は本来言知主であり、武力ではなく言論で統治する王様を意味していた。この二人は日本中に薬草を広め薬の神様と知られるようになった。大国主は各地の豪族の姫と結婚して勢力を拡大していった。出雲族の分家であり由緒ある宗像家三女神のタキヅ姫とも結婚しアジスキタカヒコネと高照姫を生んだ。女性優位社会でもあり、高照姫は血筋的にも家柄的にも最強レベルの姫だった。

徐福はアメノホヒに仲介させ高照姫との結婚を大国主に認めさせた。五十猛（イソタケ）が生まれた。
さらに徐福は国王になるために、タケヒナドリを使い「海童がサメを捕まえて騒いでいる（サメはワニ神）」と大国主を海へ誘い出し、 海童たちに捕らえられ猪目洞穴 （出雲市猪目） に閉じ込めて暗殺した。さらにヌナカワ姫が住む美保の崎で釣りをしていた副王の事代主も捕らえられ船で淡島に拉致され洞窟に監禁し暗殺した。 海童の一人が白状してアメノホヒ親子の仕業とわかる。父の大国主を殺され高照姫は里帰りした。危険を感じた徐福は息子の五十猛を残して秦の国に逃げ帰った。事代主の妃の沼川姫は、御子の健御名方富彦と越国にかえり、健御名方富彦は信濃国の諏訪地方に進出し出雲王国を広げた。諏訪に塞の神信仰が伝わった。

記紀では徐福のことをスサノオ（素戔嗚尊）と隠して書いた。

アメノホヒの子孫が徐福の悪事を出雲の人々が思い出さないよう編纂に関わる忌部子人に頼んだ。徐福の名前が記紀に表されていないのは、出身の中国に、日本は中国人に乗っ取られたと思われたくなかったから。

徐福と高照姫の息子五十猛は、アジスキタカヒコの娘の大屋姫が高照姫に頼まれ面倒みた。大屋姫により塞の神信仰を教えられ、正月神の大年神をリスペクトした。自分を大年彦と名乗った。五十猛（イソタケ）率いる秦族（徐福が連れてきた海童や技術者）は、出雲の人々に嫌われていたので、丹波国に拠点を移した。丹波に秦族を集めカゴヤマ（香語山）と名を改め、後にその一族が**海部氏**となった。海部氏は籠神社や真名井神社の宮司を務めている。海部氏が公開した系図のトップは天火明命アメノホアカリ（徐福）、次が天香語山命カゴヤマとなっている。真名井神社の主祭神の豊受大神はトヨウカノミコトで稲荷神社の祭神ウカノミタマと同じ神。失われた十氏族なら=ヤハウェと言える。真名井神社のマナは旧約聖書に出てくる無限に降ってくる食べ物「マナ」のこと。豊受大神も食を司る神様。

徐福が連れてきた海童たちはワタツミ海神と呼ばれのちに「安曇氏」になった。徐福の子孫の海部氏とは親戚のような関係。どちらもユダヤの血を持つ。

出雲国では、主王、副王が暗殺された土地を嫌い、東出雲王家の事代主の息子クシヒカタと妹のヒメタタライスズヒメ、イスズヨリヒメは関西に移住、大勢の出雲人も一緒に移住した。大阪の高槻から向日市あたりを領地とした。さらにクシヒカタ一族は大和（奈良）に王国を作るべく葛城に移住した。東出雲人は葛城山の東麓を開拓した。そして事代主を祀る一言主神社や鴨都波神社を建てた。富家を登美家と呼んだ。正統の富家は神を意味する「カモ家」と呼ばれた。
　西出雲王家の大国主の御子アジスキタカヒコネも大和に移住しカモ族と呼ばれたが区別するために「高鴨家」と呼んだ。南葛城方面を開拓して後にアジスキ高彦を祀る高鴨神社や大年神や高照姫を祀る御歳神社を建てた。

徐福は、始皇帝に願いもう一度和国に渡来してきた。北九州に上陸した。今度は饒速日と名のった。出雲王家の分家の宗像家三女の市杵島姫を妃に迎えた。ヒコホホデミ（彦火火出見）とホヤヒメ（穂屋姫）が生まれた、彼らの子孫が物部氏となった。徐福は 5000 人を超える人を連れてきた。その後の日本では相当な人口になったと考えられる。

徐福は異母兄妹の五十猛（カゴヤマ）とホヤヒメを結婚させて村雲が生まれた。徐福は死んだ。

丹波国の王となった長男の村雲は海部氏の当主となった。
大和地方が和国の都にふさわしいと考え、何年もかけて丹波の秦族を葛木周辺に移住させていった。一般の人々にも水田耕作の指導をして人気を得ていた。出雲族をリスペクトしていた。
当時、大和地方は徐福に暗殺された事代主の息子奇日方（クシヒカタ）が大和王国を作ろうと頑張っていた。奇日方は村雲と妹のヒメタタライスズヒメとの結婚を認めた。村雲が事代主を祖に持つ

東出雲王家に婿入りした。これにより出雲王家と海部氏が統一し、大和王権が樹立した。村雲は初代大王となった。村雲=神武天皇ということになる。この時、出雲王家よりお祝いとして銅剣が贈られた。これが「天村雲剣」（草薙剣）と呼ばれ尾張家に伝わり熱田神宮に収められた。

出雲族は朝の太陽を拝む太陽信仰だった。大和では三輪山から太陽が昇る。形の丸い三輪山は妊娠した女性のお腹を連想させるから女神の山と信じられ、太陽神も女神と考えられていた。出雲族は女性優位の母形家族制だったようで重要な祭祀は女性が務めていた。三輪山の登山口に狭井神社が祀られているのは塞の神が祀られているから。三輪山の西方にあたる磯城郡は、出雲から移住してきた富家が居住し磯城家（しきけ）とも呼ばれた。村雲に続く王家は2代続けて磯城家から后を迎えている。出雲の血が濃くなった王家は出雲王家の意識が強くなり磯城王朝となった。

古代の日本は、縄文人とクナト族が交わって出雲王国が誕生し、出雲王国と徐福の一団が交わってヤマト王権が成立した。天照系天孫族の正体は徐福のことだった。

ヤマト内における勢力図は、1 位は出雲富家から枝分かれして大王家と呼ばれた磯城家。2 位はヤマトに移住した元富家の登美家。3 位はヤマトに移住した西王家アジスキタカヒコネの一族の尾張家。磯城家 4 代目からは大王家の力が弱まり、元々同じ王家の四つの勢力が覇権を争うことになっていった。この頃はまさにトップ不在の時代だった。魏志倭人伝に記される倭国大乱の時代の入り口。

さらに朝鮮半島からやってきた天日予（アメノヒボコ）の一団が力を持ち始めた。ヒボコ直系の神床家によると、ヒボコは朝鮮半島南部の辰韓という国の王様の長男だったが、後継を次男にしたかったため、ヒボコに家来をつけ、財宝を持たせ日本に送ったと伝わる。

ヒボコ一団は、出雲に上陸しようとしたが「この国の法律を守るなら」という条件を受け入れなかったために、大名持ちは上陸を許さなかった。しかたなく豊岡市付近に船の上で 1～2 年生活したが、近くの津居山を削り、沼を結界させて平野を作り、住み始めた。出石神社を建立した。

村雲が初代大王となっていた出雲とヤマトの出雲王家は銅鐸をシンボルとする連立王国となっていた。ヒボコは死んだがその子孫たちは先住民を追い払いながら但馬国で勢力を拡大していた。隣の丹波を拠点とする海部氏勢力が攻め込んで但馬国を奪い取った。ヒボコの子孫たちたは播磨に侵攻せざるをえなくなった。出雲王国と全面戦争になり宍粟地方を奪い、鉄資源をもとにさらに勢力を拡大していく。播磨は出雲と大和の間に位置するから連立王権の交流が分断されてしまった。東出雲王家の富家は古代から続く女神をご神体とする銅鐸信仰を捨て、男神をご神体とする銅剣に変更し武力を重視する軍事国家を目指した。それにより出雲との連立政権も終わった。

その頃、北九州に上陸した徐福=饒速日命が立ち上げた物部王国が勢力を拡大し始めた。饒速日から6～7代の王子イツセが大和への遷都を企て進軍した。この「第一次物部東征」を紀の川の対岸で待ち受けていたのは磯城家の王子大彦だった。第8代孝元天皇の時代。大彦は大和葛城の笛吹村の東北にある曽大根で育ったことから別名ナカソオネ彦と呼ばれていた。大彦=ナカソオネ彦=長髄彦だった。第一次物部東征=神武東征だった。物部=天孫族。

大彦のルーツでもある初代大王村雲の一家の尾張家の力も借りて物部王国のイツセと戦った。イツセは矢にあたり死亡。第一次東征は敗北。イツセの後は弟のウマシマジが継いだ。ウマシマジは迂回して熊野にたどり着いた。熊野の徐福伝説はウマシマジのことだった。物部軍は熊野川をさかのぼって上陸したがヤマト王国からのゲリラ攻撃を受けて退いた。

物部の大船団を見て技術力の違いを感じた大彦は、自身のルーツの一つである出雲王国の東王家の富家に協力を申し出た。大彦は富彦と名乗っていたくらい富家を誇りにしていた。しかし朝鮮半島からやってきたヒボコ軍に敗北していた富家は力がなく断った。進軍するにはヒボコ軍のいる播磨も通らなければならなかった。さらには物部軍が近い出雲王国を攻めてくる恐れもあった。

出雲王国の力を借りられなければ、次は物部勢力に負けるだろうと大彦は考えた。大王家内部では後継争いがあり次の大王（おおきみ）の座は異母兄弟に奪われつつあった。大和を出て違う場所に自分の国を作ろうと考えた。出雲富家から、出雲と大和以外では「トミ（富）」を名乗ることを禁じられた。日本海側の同盟国を頼るよう紹介状をもらった。のちに大彦は「アベ氏」を名乗る。

大彦が去ったヤマト勢力は一気に弱体化した。しかし、物部勢力はまだ気づかなかった。
そこでヤマト勢力の登美家出身の太田タネヒコ（太田タネコ）が暗躍しはじめた。大彦がヤマトから去った状況を見てヤマトを統一するのは物部勢力になると確信していた。熊野の物部勢力をヤマトに導き磯城家や登美家をヤマトから追い出し自分が大王になろうと企てた。

タネヒコは熊野の物部勢力に使者を送り、その後家来を連れて熊野を訪れヤマトに導くことを伝えた。物部勢力を裏ルートでヤマトに導いた。その時タネヒコは「登美」の姓を持つと偽っていた。物部は鳥のトビを連想した。タネヒコは太陽信仰だったために「黄金色のトビの道案内」や「八咫烏の道案内」と呼ばれるようになった。徐福がやってきた中国には太陽に住む三本足のカラスの伝説があったからタネヒコのことを太陽の象徴の八咫烏に例えた。八咫烏とは登美家の分家の太田タネヒコのことだった。

大彦軍勢が去ったヤマトは弱体化していた。物部勢力が侵入してきたことを知ったヤマトの各勢力は外に逃げ出した。大彦の腹違いの孝霊天皇がトップに就任していたがヤマトを出ることを決断。物部軍勢は簡単にヤマト侵入に成功できた。

ヤマトは銅鐸信仰から物部の銅鏡信仰に変わっていった。この頃の物部は星神信仰から銅鏡祭祀になっていた。鏡は古代エジプトでは太陽を象徴するものと考えられていた。

大彦は始めに伊賀のあべ国を地盤にしていたからアベ家を名乗り後に安倍家になった。

出雲国王　富族の大彦（事代主の子孫・富彦・長髄彦）の大阪の三島に移住し安倍と名乗り島だった地に三島神社を創る。

大彦はアベ氏を名乗り、息子のヌナカワワケと共に三重県の伊賀の地に王国を作って銅鐸祭祀を復活させた。ヤマトの物部勢力 vs 伊賀の大彦勢力の宗教戦争に発展した。物部勢力が優勢になり伊賀国まで侵攻してきた。

大彦が琵琶湖東岸に逃れた。息子の狭狭城山君はこの地に住み着いて佐々木となった。

大彦は息子のヌナカワワケと別れて各地を転々として銅鐸祭祀を続けていった。東海にクヌ国、北陸にクヌガ国を立ち上げた。大彦は信濃（長野県）で亡くなる。

大彦の子、タケヌナカワワケがさらに物部に追われ伊豆に退去した時には、伊豆北端に三島の名をつけ、三島大社を建て祖先の事代主を祭った。さらに追われ茨城の鹿島に移り建御雷神を祀り鹿島神宮を創る。日立の国と称す。今度は中臣氏（後の藤原氏）が鹿島神宮を奪って建御雷神を自分の氏神とした。

その後も物部勢力と戦いながら、大彦の子孫とタケヌナカワワケの子孫が会津で合流し、拠点を陸前（宮城）・陸中（岩手）に移し、太陽信仰だったので日高見国（荒覇吐国・安倍王国・アラハバキ水軍）を創る。国名を日高見国とした。日本には和国と日高見国と二つの国ができた。大和朝廷は東北の人を蝦夷と呼んで蔑むようになった。

平安時代に征夷大将軍の源氏により安倍貞任・宗任兄弟は打ち取られる。安部貞任の子　高星丸は津軽に生き延び、安藤（安東）を名乗り十三湊で安東水軍を作り大陸と貿易。十三はトミ。宗任の子は北九州で松浦水軍となる。日高見国は津軽の亀ヶ岡に都を移す。遮光器土偶は出雲族の女神アラハバキ神像。日高見王国は別名アラハバキ王国とも呼ばれた。アラは竜。ハバキは巻きついた御神木。遮光器土偶はアラハバキ土女神像と呼ばれていた。模様は竜を表していた。

日本に存在した和国と日高見国は、鎌倉時代まで続いた。鎌倉時代後半に北条執権の支配下に入り安部王国はついに滅亡。蒙古襲来の勝利は安藤水軍の活躍を隠すために神風が吹いたことにしたらしい。
その後十三湊は津波に襲われ安藤家は衰退、秋田に逃れた一派は秋田水軍となった。

蘇民将来の蘇はイスラエルのこと。将来は来た人の意味なので、イスラエルから来たユダヤの民=物部一族のこと。

物部に追放され、村雲から始まった尾張家は伊勢湾地方に移動して尾張国を作った。一緒に戦った海部氏は先祖の地の丹波に戻った。

（書きかけ）

参考
・出雲副王の事代主→富（鳥海）家 →長髄彦→賀茂家→安倍（阿部）家→ 安藤（安東）家→秋田家

出典/
出雲と蘇我王国-大社と向家文書- 斎木雲州著
出雲王国とヤマト政権-伝承の日本史- 富士林雅樹 著
TOLAND VLOG、
IRIS の神社 YELL、他